

紫雲丸遭難六十六周年追悼式 式辞

紫雲丸遭難事故六十六周年追悼式にあたり、学校を代表いたしまして、一言、ご挨拶を申し上げます。

ご遺族、同窓生、関係の皆様方、本日はご列席いただきまして、本当にありがとうございます。昨年の追悼式は、臨時休校中のため校内の限られた者のみで行いましたが、今年は多くの皆様方にご列席いただいて、二年ぶりに追悼の式典を行うことができますことに感慨深いものがございます。

事故発生六十年の節目として四年前に発行された紫雲丸事故追悼集「『友は海神に抱かれて』～紫雲丸事故を語り継ぐ～」には、ご遺族や同窓生のご友人の方々が多数寄稿されており、私は本校への赴任にあたり、その全文を読ませていただきました。

その中で、日本全体が貧しかった時代に保護者の方が苦勞して旅行代金などをご工面されたことや、いかに生徒の皆さんがこの旅行を楽しみにされていたこと、そして濃霧の瀬戸内海で事故が起こった原因と経過、さらにはその後の数々の辛い体験などを知りました。

南海中学校の生徒二十八名を含めて、百六十八名のもの犠牲者が出た中で、事故の辛さからなかなか立ち直ることができなかったという方、ご自分が生き残られたことを後悔されている方、また生き残ったからこそ人生を受け止めて充実した生活をしたいと心に誓っておられる方など、さまざまな思いを感じ取ることができました。

この追悼集の中から、改めて、お三人の方の思いをここで紹介させていただきます。

「その当時は大変貧しい時代であった。修学旅行に行けない友達もいる中で、親が苦勞して旅行に出してくれたのだということを、自分も親になって改めてありがたさに気づいた。」

「今思いますことは、『命は助かっただけでも有難いと思わなければならない』ということです。毎年五月十一日が来ると亡くなった友達のことを思い、手を合わせています。今の友人からはよく『亡くなった皆が貴方を守ってくれているのよ』と言われます。私もそう思います。」

「今日、私たちは豊かで恵まれた生活をしているのに比べ、貧しい時代にわずか十四歳で命を奪われた友の無念を思うとき、生かされた自分は如何に過ごしてきたか反省しています。」

今、私たちが生活するこの地域は、南海トラフ大地震、それに伴う津波の被害から逃れることはできません。しかし、一人ひとりに与えられた命を大切に守り抜くことは、必ずできると思います。

南海中学校では、中学生の誰一人として命を落とさない、さらにはその中学生が長浜・御畳瀬・浦戸地域の防災リーダーとなって地域に貢献できるよう、避難訓練や防災学習に努めています。これも、六十六年前のこの悲しく辛い体験から脈々と引き継がれ、培われてきた、南海中学校の教育活動を一貫する精神ではないかと存じます。

南海中学校は、授業、命・人権、なかまを大切にする中学校です。

ここで学ぶ生徒たちが、中学校生活を満喫し、心も体も立派に成長し、地域に誇れる南海中学校にすることが、六十六年前の五月の冷たい瀬戸内海で亡くなられた二十八名の方々の何よりのご供養になると考えています。

最後になりましたが、ここに二十八柱の御霊のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族、同窓生の皆様方のご健勝とご多幸を心から祈念いたしまして、追悼の言葉といたします。

令和三年五月十一日 高知市立南海中学校 校長 廣瀬 啓二